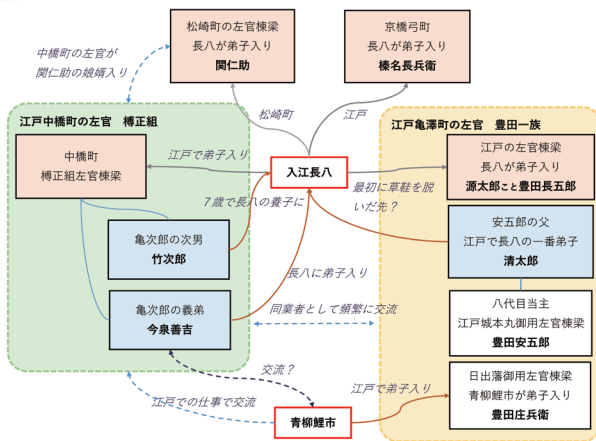


# 入江長八と大分に残る鏝絵

## 第5回 日出の左官青柳鯉市の足跡

東京都立大学 プレミアム・カレッジ 本科・専攻科修了  
一級建築士 立川 公彦

### 1. 入江長八と青柳鯉市の接点をさぐる



↑ 図1 入江長八と青柳鯉市の関係図

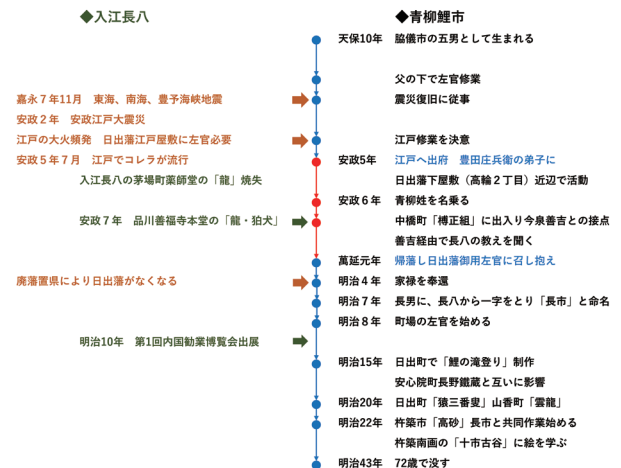
入江長八と青柳鯉市の接点を探るために、先ず長八が江戸に出てから関わりを持った人たちから辿ってみました。長八が松崎町から江戸に出たあと「草鞋を脱いだ」先には、いくつかの説があります。先ず挙げられるのが「左官棟梁の源太郎」です。長八の菩提寺である浅草の正定寺には、江戸へ出て、左官棟梁源太郎の弟子となったと紹介されています。また、結城素明著の「伊豆長八」には、江戸城本

丸御用左官の親方長五郎（一に源太郎との云う）の家に草鞋を脱いだとあり、「源太郎」と「豊田長五郎」が同一人物とも考えられます。さらに「波江野亀次郎」です。次男を長八の養子に出し、夫人の弟も弟子に出しています。安政5年2月の大火で八名川町の長八の家が被災した際も、しばらくの間、亀次郎の家に避難したとされています。関係は師匠と弟子という関係を越えた密接なものとなっていました。その他にも京橋弓町の榎名長兵衛のところで草鞋を脱いだという説もあります。いずれにしても、どこで最初に草鞋を脱いだか確証はありませんが、長八が何軒かの親方の家を渡り歩いたものと考えられます。

次に、青柳鯉市が江戸に出てから関わりを持った人たちを辿っていきます。鯉市の江戸での修業は、日出藩出入り左官棟梁である豊田庄兵衛の弟子となることで始まりました。正式な出入り左官としての弟子入りではありませんでしたが、藩の江戸屋敷に関わる左官仕事を中心にしていたと思われます。そのことは萬延元年（1860年）に帰藩したと同時に日出藩に左官として召し抱えられていることから推察



↑ 図2 正定寺（浅草）にある入江長八の年譜



↑ 図3 年譜で探る入江長八と青柳鯉市の接点

できます。師匠の豊田庄兵衛は豊田一族の左官でした。豊田一族の棟梁であった源太郎こと豊田長五郎は、若い長八に軒を貸しました。後に江戸城本丸御用左官棟梁となった豊田安五郎は、その父である清太郎が長八の一番弟子となったと語っています。鯉市の立場を考えると、師匠である庄兵衛の人脈で、鯉市が長八から直接指導を受けることは困難であったと思われます。但し、鯉市は江戸修業の中で中橋町の樽正組に入入りしていたとの記録もあることから、鯉市の仕事は日出藩江戸屋敷関係に止まらず、豊田一族と樽正組の関係でも交流が広がったものと考えられます。そうした中で、ほぼ同年齢の今泉善吉との交流を持ち、鍔絵に関することを長八の弟子から又聞きすることで、間接的ながら入江長八の教えを学んだとも考えられます。



↑ 図4 青柳鯉市と今泉善吉の接点？善福寺本堂（品川）

## 2. 青柳鯉市と安心院左官のつながり

現存する鯉市の作品で最も初期のものは、日出町に移設保存されている「鯉の滝登り」で明治15年の制作とされています。画題の選定は、施主の繁栄や出世の願いを直接的に表現したものとなっており、その後の大分における鍔絵の画題に影響を与えたのではないかと考えられます。明治20年に制作された山香町の「雲龍」（第2回で掲載）は、青柳鯉市の代表作とも言える作品です。渦巻く雲と龍の躍動感、かつて江戸で見た長八の作品を意識したのでしょうか。彩色は練り込み技法で現在も鮮やかさを保っています。同年制作した日出町の「猿三番叟」（第2回で掲載）は他に類例を見ない画題と構図で鯉市

の独創性を感じる作品です。こうした作品は他の地域の左官たちの衆目に晒されることになり、安心院周辺の鍔絵に影響を与えていったと考えられます。日出周辺では、初期の頃は人物の画題は少ないが、明治後期には恵比寿や大黒などの画題も見られるようになりました。これは、逆に安心院の鍔絵が日出周辺にも影響してきたのではないかと考えられます。

明治22年に鯉市が息子の長市と共に制作した杵築市の「高砂」と「日の丸」（第2回で掲載）に、鯉市の意思がよく表れていると感じます。それは入江長八が弟子の今泉善吉に北品川の善福寺の仕事をさせたように、「高砂」は長市に大部分を任せたと見えてなりません。弟子でもある息子の長市に対する親としての期待がよく顕れています。

安心院で確認されている最も初期の作品も鯉市と同じく明治15年（1882年）「朝顔・雷」と題された長野鐵蔵の作品（第3回で掲載）です。幾何学的な模様を非常に巧みな鍔裁きで表現しています。安心院の鍔絵は、後年施主の願い事を直接的に表現する画題に移行していきますが、この頃の画題は装飾的要素が強くと感じられます。その後の作品は、虎や龍、鷹、恵比寿や大黒など巧みな鍔裁きによる装飾というより、施主の喜ぶ画題の選定に重点を置いたと考えられます。

大分の鍔絵は、そのほとんど建物の外壁や戸袋など目立つ位置に意図的に設置されていることから、誰でも容易に観ることができます。明治中期から地域の繁栄と共に建てられた住宅や土蔵の外壁に次々に鍔絵が施され、それを観た左官職人たちは、自らの腕を振るって、工夫を凝らした鍔絵を制作していったと考えられます。安心院の左官たちも江戸で修業したという評判の鯉市の制作した作品を観て、また鯉市など日出の左官たちも長野鐵蔵たちが制作した安心院の鍔絵を観て、相互に影響し合ったのではないかと考えられます。その結果、明治後期には、画題の選定や鍔絵技法などが相似してきたのではないのでしょうか。

〈次回は最終回となります。あらためて鍔絵とは何かをまとめてみたいと思います。〉